

## トランプ氏の勝利は、「世界にとっての災禍」 （鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2016/5/10 6:30 | 日本経済新聞 電子版

大型連休ということだったのだが、身についてしまった貧乏性で、暦に従って仕事をしていると、1日出勤しては2日の休日、しかも、オフィスの雰囲気もなんだかのんびりして、変な気分になる。思い切って10連休にした方が、すべてがリフレッシュして良かったのかも知れない。連休は日本だけのことで、世界中のマーケットは開いているわけで、為替や株価が大きく変動している時期に、日本市場だけが閉じられているのはいかなものかと思うのだが、世界の市場が動いているからといって、証券市場をはじめ、金融機関の人間だけは連休なしにすべきであるとも言い難い。

### ■最下位の階級が担った文化

連休も最後の土日は、青空が広がり、初夏のような日射しになって、新緑に光が乱反射してまぶしく風に揺れている。せめて、日を浴びようと、都心を散策する。東京は街路樹の整備が行き届いて、緑があふれている。クルマの数も少なく、いつまでも歩いていられる。坂道が多い東京は、「富士見」という地名が多い。昔は、富士がどこからでも見る事ができたのだ。あてどない散歩で、大きな通りを外れ、裏通りに入って、路地から路地を歩いてみると、鼠坂（ねずみざか）だとか植木坂といった変わった標識があって、地名の由来が書かれている。クルマのない時代の路地は、軒を接するように民家が並んでいたのである。由緒ある地名が消えてしまった東京だが、坂道や路地には、昔をしのばせる故事来歴が書かれた標識があって、そんな標識を読みながら散策するのも懐かしい気分になる。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催する。近著に「日本インターネット書紀」がある。

19世紀の半ば、島国という地理的な状況に守られて、帝国主義が跋扈（ばっこ）する時代にも鎖国を続け、徳川時代という世界にもまれなほど、長期にわたって戦争のない特殊な時間軸のなかで、ある意味では、もっとも高度な文化を育んできた日本だが、ペリーの来航以来、その歴史は国際状況に対応する道を選ばざるを得なくなって、政治面ではもちろんのこと、人々の日々の暮らしにいたるまで、大きな断絶を経験して今日がある。欧州であれば王侯貴族が贅（ぜい）を凝らした慰めとして様々な芸術を発展させたのだが、日本は土農工商という固定的な階級制度がありながら、それとは逆に、文化・芸術を育てたのは最も下位にあった富裕な商人であり、町人であった。能や儒学は別として、歌舞伎から浄瑠璃、長唄、小唄、端唄に至るまで歌舞音曲、俳句等々も富裕な町人層が支えたのである。もっとも下位の階級が文化を担った、不思議な歴史を持っている国である。それは西欧文化が、その資金の多くを、ともすれば被差別下にあったユダヤの人々が支えていたということとは、違った歴史である。

私が主宰をする今年の春の音楽祭では、日伊修好150周年を祝い、イタリアと日本の演奏家がひとつになってオーケストラをつくり、リッカルド・ムーティさんの指揮で、ヴェルディやボイトの作品を上演した。素晴らしい演奏会となり、夏には、同じ形でイタリアの音楽祭で上演することになっている。私の住まいからほど遠くない場所にある靖国神社には、神社がつくられて150年になると大書された看板がある。改めて150年という歴史が、頭をよぎって、ふと、柄にもないことを考えてしまった。

第2次大戦後、70年が過ぎた。悲惨としか形容できない長崎・広島への被爆、そして敗戦は、日本が各国と様々な不平等条約を結んでから現在に至る時間軸から見ると、ちょうど半ばに起きたことなのである。敗戦間もない頃、かまぼこ兵舎や広大な芝生に点在する進駐軍の住居群に囲まれた場所で、私は育ち、戦後民主主義を理想とする教師が集まった公立小学校、中学校に通っていた。左翼のたまり場のような学校だなあと、育ててくれた方は笑っていたのだが、今、思い返してもおかしくて笑ってしまうことが多かった。ロシア民謡からイタリアの革命歌にいたるまで、毎日、放課後に歌わせられたりした。とにかく徹底して戦前の日本を批判することに終始していた気がする。革命や共産主義、社会主義の夢に対する思い込みと名残りが、濃厚にあった時代である。

社会人になって、生産拡大に追われ続けていた高度成長期に、工場に行つては、生産性向上、品質管理や改善活動といったことのサポートをしていた。省力化やコンピューター化がもっとも大きなテーマだったのだが、あくまで生産の拡大が重視されていた時代である。集団就職で大量の若者が地方から工場に吸い込まれていた時代で、人口も増加し、労働者の確保に不自由

しない時代だった。中卒や高卒の優秀な若者が、技能の担い手として、生産現場の底辺を支えていた。もちろん、組み立てラインで朝から夕方まで、繰り返し同じ作業を続けることに、反発する若者や、流れ流れてといった人生を送ってきた女子工員さんもいて、冷ややかな態度に終始していた。それでも、日本の工場であって、小集団活動などの成果を発表し、工場長表彰の折など、努力が報われたということで、素直に頑張っていた。工場長が集団就職で工場に来てくれた工員さんと居酒屋で会をするといったことは、海外の工場では、まず、あり得ない話だった。

## ■ 民主主義の根幹の危うさ

連休中、トランプ氏が共和党の大統領予備選で圧倒的な得票をとり続けて、結局は、共和党の大統領候補になる趨勢（すうせい）が固まってしまったようだ。英エコノミスト誌は、"Trump's triumph"という記事に"Donald Trump's victory is disaster for Republicans and for America"という見出しをつけて、辛辣な記事を書いている。最後に"The balance of probability is against, but none of this is impossible"とし、「それこそ、トランプ氏の勝利が、共和党にとって、また米国や世界にとって悲劇を生むものだ」と書いている。

政策とは言い難い粗野な暴言に終始するトランプ氏が大統領になる可能性が、まったくないわけでもないのである。私には、トランプ氏が、共和党の大統領候補になったことは、選挙民が投票で政治家を選ぶという民主主義の根幹にかかわる制度が、極めて危うい状況になっているのではないかという深刻な思いに至ってしまう。ソクラテスが投票によって有罪とされ死を選んだという話から、ヒトラーも選挙で多数を占めたという事実まで、民主主義の根幹の制度が、基本的に危うい構造であることは、既知のことである。扇動者の台頭を許すほどの社会への不満があつて、初めて扇動者のアジェンダがdisasterとなるのであって、天災ではないのだから、防ぎようがあるはずだが、それが「民主主義」と「表現の自由」を標榜している米国で起こっていること自体が、ことの深刻さを浮き彫りにしている。日本の参議院選も近い、選挙権が18歳以上となる初めての選挙である。幸いにして、日本には過激な扇動者もいないと、米国の騒ぎを他人事だと割り切っているのだが、どうなのだろう。グローバル化が進み、国の債務が膨らんでいく中で、社会民主主義ともいえる戦後日本の資本主義のスキームが、未だに崩壊をしていないと言い切れるわけでもない。格差問題と閉塞感が、爆発する寸前まできた米国とは違うにしても、そのかじ取りについては、できる限り適切な対応を願うばかりである。

「メタデータがあれだけ集積し、個人情報の監視・管理が進んでいるはずの米国でも、国民の意識までは、コントロールができないということで、安心する話でもあるよね」

友人は、酔った席にしても、無責任なことを言う。スノーデンが内部告発という形で、NSA（米国家安全保障局）の活動を暴露したのは2013年のことである。日々の消費に始まって、個々人の感情から行動予測まで、あらゆることが監視下に置かれるようになってしまうのではないか。3~4年も経てば、より高速のプロセッサが実現し、AIが汎用的に利用できる形になれば、個人情報の監視・管理は飛躍的に進むはずである。そんなIT（情報技術）の進展にもかかわらず、扇動者に共感する人間の活動は、コントロールができないのではないかと、妙なことが頭に浮かんでしまう。連休の終わりになって、私の脳の働きは、休みを欲しているようだ。

鈴木幸一IIJ会長のブログは毎週火曜日に掲載します。

鈴木幸一 IIJ会長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。  
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

## 読者からのコメント

### 泉野普久さん、60歳代男性

人の悪口を言ったり、片方を差別的にやり玉にあげたり、見た目でも、ふるまいやらも下劣な印象で、リーダーにはしたくないイメージです。何者なんだろう。そんな人がまさか、まさか、あれよあれよと大統領候補になってしまう。今度は「アメリカって何」という感じだ。苦しくて辛くても選んではいけない、そんな迷いもなく、圧倒的な支持を得てる、与えてるアメリカ。何が起こってるんでしょう。格差こそは利益だという怪奇のアメリカよ。鬱陶しいけど、トランプ来襲と受け止め対策しなくてはなりませんね。我が国もあんなみっともないことをしないように、まさに人情豊かな町人文化で押し返しましょう。

### 嘆きの60代さん、60歳代男性

ほぼ世界同時進行で民主主義の形が崩れつつある。ヨーロッパ、英国、米国など今までの世界を形造ってきた国でのその傾向が大き

い。単に格差拡大、不平等感、貧困などが要因でないであろう。なぜそこまで人間の心が荒れて来たのか、またその周期はどの位で発生したものか、研究テーマとして面白い課題である。やはり基本的には世界的閉な塞感、どこにも捌け口を見だせない時期に発生しているのであろう。人間誰も幸福とより良い生活、これはもちろん物質的側面であるが、求めている希望が叶わない時に発生するのであろう。その時それを利用する人間が表れる、ヒトラーであり、トランプである。今後もこの現象を見て行くと大きな歴史の流れを見ることができる。今しばらく興味を持って眺めてみよう。

**団塊の凡人さん、60歳代男性**

おっしやる通り、「民主主義の危うさ」に真剣に対処すべき時だと思っています。核兵器という極めて強力な抑止力が、大国間の戦争発生確率を限りなくゼロに近づけた一方、それは、否応なく社会構造のリセットをもたらした戦争の役割（唯一の肯定的役割）も失わせた。地震と同じで社会構造もひずみが蓄積する以上、どこかでリセットする必要があるが、戦争を除くと現実には選挙しかない。しかし、トランプ現象の米国に限らずどここの国でも、社会が不安定であればある程、閉塞感が強ければ強い程、人々の不満が大きければ大きい程、口が達者で演技が上手で流れに乗るのがうまい人が当選する。こういう時期には思慮深い候補者は決して当選しない。社会が不安定な時期は民主主義は非常に危険。選ぶ側の有権者は、知識・見識が無くても年齢だけで一票与えられるのだから。

**ランガーさん、50歳代男性**

日本ではバブル崩壊後の貧富格差と政治的無策が、アンチ既存政治という形で、自由民主党から民主党が生まれ政権の座についた。アメリカではリーマンショック後に日本のそれとなじような社会背景の中で、共和党が分裂状態となり、既存政治家とは一線を画すトランプ旋風、サンダース旋風が起こっている。両国で共通するのは著しい経済崩壊が起きている中で、社会の不平不満を集めた「団体」と「人」が躍進しているという事実。我々は時間軸で起こっている社会現象を深く洞察することで、将来起こりうる過ちを回避できるよう行動すべきであろう。後悔先に立たず。しかし、「世界の箱庭」である日本で起こった事象が、「世界の大国」であるアメリカで10年の歳月を経て今始まろうとしている。

**河内伸さん、50歳代男性**

米国に蔓延している低所得層の不満、不平のはけ口がトランプという億万長者を大統領にしたいという冗談のような真実にまず戸惑う。米国もリーマン・ショック以降、中流階級の数が落ち込んで、低所得層が増加する中、保守主義&排他主義という不寛容な思想を持つ人が増えていることが一番問題だ。私はまったく宗教家ではないが、「汝、隣人を愛せよ」という聖書の言葉が最近切実に必要ではと感じる次第だ。